

パラスポーツ観戦の目的を 明確にした上で、 「応援したくなる気持ち」を丁寧に育てる

日本生命は、人材育成および共生社会の実現・パラリンピックの成功など地域・社会が取り組むテーマに対して、同社が協賛している車いすバスケットボールを中心に積極的に取り組んでいる。全国の社員にパラスポーツ観戦を呼びかけるため、イントラネットを中心に情報を発信。動画も活用し、パラスポーツの魅力を分かりやすく訴求している。



日本生命保険相互会社



人材育成とパラリンピックの盛り上げを連動



皇后杯日本女子車いすバスケットボール選手権大会の様子

同社は、パラリンピックへの関心の向上、応援機運の醸成を図るとともに、「支えることの大切さや楽しさ」を社会に広めたいとの想いから、パラスポーツ観戦を、本格的に取り組み始めた。

「当社では、企業スポーツ応援の文化が根付いていたものの、パラスポーツ観戦においては、なかなか共感しても

られませんでした。そこで、2015年からスタートしていた、人材育成のための「人財価値向上プロジェクト」と、パラリンピックを紐づけることにしました。」(オリンピック・パラリンピック推進部東京2020推進担当 荻野祥太課長)



荻野課長

手始めに、2016年2月に、国際親善女子車いすバスケットボール大阪大会の観戦希望者を募集。複数の部署とも協力しながら、情報を発信。最初の観戦会には約300名が参加した。以後、全国のパラスポーツ大会のスケジュールを随時掲載して観戦を呼びかけ、観戦会の回数を増やすなどして、これまでに、延べ約2万名が観戦に参加した。



企業情報

日本生命保険相互会社

【担当部署】 オリンピック・パラリンピック推進部

【住所】 東京都千代田区丸の内1丁目6番6号

【URL】 <http://special.nissay-mirai.jp/tokyo2020/>



きめ細やかな情報発信で盛り上げを演出

競技や選手に興味を持ってもらうために、力を入れたのが、イントラネットによる情報発信である。まずは、ルールや魅力といった基本的な情報を掲載。さらに、同社社員の北間優衣選手の生い立ちや、競技を始めたきっかけ、意気込みなどを取材。その様子を撮影した動画を、幼い頃の写真やオフショットも織り交ぜて編集し、アップした。



オリジナルTシャツとスティックバルーンで応援

「地道ですが、情報をこまめに発信しています。それを見て、大会会場で観戦・応援に行ってみようと思っていただければ、うれしいですし、全社員がパラスポーツに興味を持った状態で、東京2020大会の本番を迎えられたらと期待しています。」(荻野課長)

パラスポーツ観戦は企業にとってもメリット

車いすバスケットボールを盛り上げようという活動は、社外に向けても展開している。同社が協賛する大会の観戦地域では、車いすバスケットボールの競技・魅力の認知やファン拡大に向けて、お客様に対して、観戦・応援の案内活動を行っている。

東京2020大会を日本全国で盛り上げるために、2018年9月から全国展開した「日本生命 みんなの2020全国キャラバン」では、車いすバスケットボール体験ブースを設置し、約2万名が参加するほど好評であった。

また、同社の契約選手が登場するプロモーション動画や、スポーツを通じて、地域活性化を描いた漫画も公開中である。その一つに、女子車いすバスケットボールのプレーと若きアーティスト SASUKE氏がコラボした、動画「The Beats of Game」も、新たな側面から競技の魅力を伝えている。



「The Beats of Game」の動画
▼こちらからご覧いただけます
<https://www.youtube.com/watch?v=9YmXhL29Bww>

「パラスポーツ観戦は、人材育成の観点で成長の機会となるのと同時に、当活動を通じて、社会のサステナビリティ(持続可能性)の向上に貢献していくことが、結果的に、お客様からの信頼に繋がっていくと信じています。昨今、ダイバーシティやSDGs(持続可能な開発目標)といった課題を社会全体で解決していこうという大きな流れがある中、まず始められることのひとつが、パラスポーツ観戦ではないでしょうか。まずはTEAM BEYONDに加入して情報を得たり、気軽に大会観戦を楽しまれたりすることをおすすめしたいです。」(荻野課長)

コロナ禍における取組・今後の方向性

「日本生命 みんなの2020全国キャラバン」の車いすバスケット体験ブースでは、「参加者と選手の絆づくり」を目的として、体験人数に応じて、車いすバスケット選手に応援ボールを贈呈する企画を実施。約2万名に体験いただいた結果、全国の車いすバスケット選手768名全員に、コロナ禍で一時中断していた練習の再開に合わせて、ボールを贈呈。引き続き、「応援の輪の拡大」に向けて、取り組んでいく。